

携帯絵文字メールは日本語か

上北恭史
芸術学系講師

1. 絵文字を使いこなす感性

「☺☺☺」というメールがあなたの携帯電話に送られてきたら、なんと読めばいいのだろう。「☺☺☺」というメールに対して、どう返事をしたらいいのか。どうやってこういう文字を携帯電話で打てるのか。はたしてこういう文字を使う辞書はあるのだろうか。そもそも、これらの文字は言葉という範疇に入るのだろうか。

「☺」は「メール」で、「☺」は「ください」、そして「☺」は「なににの間の間」という意味で、これらをつなげると「メールちょうだい」になる。「☺」は「携帯電話」で、「☺」は「ルンルン」、☺は「なににの間の間」で、やはりつなげると「ケータイに電話ください」だ。

絵文字は一文字で基本的な意味を持っており、大きく分けると「感情表現系」と「アイテム系」がある。それぞれの文字を組み合わせてメッセージとして構成する。似たような表現に顔文字がある

が、顔文字は文字コードで顔の表情を作るもので、意味を持たない記号文字を組み合わせて、顔の表情を表現する。よくメールの文末に「(^▽^)」みたいなマークがついていて、「しあわせ～」というような意味の表現がされるものである。顔文字はコンピューターをはじめ、さまざまな情報機器で使えるが、絵文字は一部のモードをサポートした携帯電話にしか使えない。

この絵文字は徐々に市民権を得て、携帯メールの中に広がりつつあるようだ。顔文字と異なり、一文字で意味を持つためにメッセージの長さは短くなる。そして絵文字自体が持つ視覚的効果は、顔文字よりも直接的で豊かな表現ができる。ところがこの絵文字には「論理表現系」をあらわす語群がほとんどないから、伝えたいメッセージをすべて表現することはできない。

だから絵文字だけで構成されるメッセージは、挨拶のような簡単なものにな

るか、普通の文章の間に絵文字を組み合わせて使って、文脈の間に感情的な表現を組み込んで表現することになる。絵文字を加えることによって、親近感があり、自分の感情をさらに豊かに伝えることができるようになるわけだ。

学生諸君が講義の間に、机の影で携帯電話に打ち込むメッセージの多くは、友人たちに送る身近なメッセージである。もともと音声通話の道具である携帯電話のメール機能を使うわけだから、利用する側にもちょっとした電話をするような感覚で使うのだろう。フルキーボードで打ち込むコンピューターの電子メールよりも、携帯電話のテンキーを利用して打ち込む携帯メールは、長い文章を書くのが苦手になるから、さらに簡潔なメッセージになる。音声的で短いメッセージを作る環境だからこそ、絵文字は重宝される。

2. 感情的言葉と論理的语言

絵文字を使ったメッセージがますます増えていることは、日本語の問題として、どうとらえられるだろうか。少なくとも手紙がメッセージ伝達の主な媒体であった頃よりも、やり取りされているメッセージの情報は飛躍的に伸びているに違いない。ただ、手紙にかかれるようなメッセージと、携帯メールに書かれるメッセージの内容が

異なるのは、類推できる。

手紙を書くというのは、今となってはやや高度な日本語作成能力が要求される。頭語や時候の挨拶にはじまり、結びの言葉や敬称など、手紙を書くには必要なルールがある。主文も起辞からはいり、簡潔な文章で言いたいことをわかりやすく伝えるのが、いい手紙の見本と、手紙の書き方の本に載っている。季節感を表現し、相手との関係を尊重し、明快に書かれた文章の手紙は、誰がみてもその美しさに感銘を伴うだろう。長い時間をかけて洗練されてきた文化の感覚を着こなしてこそ、このような表現をする能力が与えられるのである。

かたや、携帯メールの気軽さは、メッセージの送り手側に手紙を書くような気構えを必要にしない。時間や場所にとらわれず、日常の何気ない会話からちょっとした用事まで、気軽に送ることができる。たとえ相手が遠く離れていても、瞬時に届けられる気軽なメールは、相手との距離感を感じさせない。まして、ちょっとした感情が絵文字に込められていれば、メッセージを共有する一体感はずっと深いものになるだろう。

手紙や携帯メールのそれぞれのよさがあるようだが、もし、携帯メールが日常の主なコミュニケーション手段になって

しまったら、日本語の表現に何か違いが現れてくるのだろうか。

3. プレゼンテーションとしてのプロセス

携帯メールに利用される絵文字が入ったメッセージの表現を、自己表現の一種と考えてみよう。

絵文字でやり取りされる挨拶や、問いかけ、感情の視覚的表現は、短期間のうちに送り手と受けての間に成立する感情的状況を共有して成立している。この文脈を共有していない場合は、メッセージは伝達されない。間違っただけのメールの中に、絵文字が入っていてもなにかしっくりこないのは、送り手との感情を共有できないからだ。絵文字の携帯メールにおいても、多くの人に対してメッセージが共有されるのではなく、仲間内や身近な人という感情的コードが一致する間で通じる、キッチュな表現ということができる。キッチュな表現は文化の先端に行く現象として時には見られるが、文化の中に根付いていくには、ある程度幅広い理解をもとに体系化されていかなければ残らない。

状況や感情を共有できる仲間内でのコミュニケーションでは、論理的な脈略を構築して自分のいいたいことを説明する必要はない。むしろ、現在の感情や状況

を表面的に表現できるほうが、コミュニケーションの潤滑油になる。だから絵文字が活躍する。

こういう背景を知って携帯メールを使いこなしていくのは、新しい表現の可能性を試していく上でも、わたしは賛成である。が、しかし、日常のコミュニケーションの大半がこれに準じるものになってしまうと、少し問題であろう。

担当しているデザインの演習授業で、何人かの学生は自分のアイデアを説明するときに、好きだからこれをやりたい、という説明をする。そのアイデアの表現に社会的役割や、人々に受け入れられる理由の説明がないのである。それは、彼らがいい加減に考えたものでは決してなく、本人は真剣に考えている。説明をしないというわけではなく、説明ができないのである。なぜなら、いろんな社会的つながりの視点よりも、自分やそのアイデアを共有できるあいだで成立する価値に、アイデアのモチベーションを見出しているからである。その表面的な共感に根ざしている以上、その共感の外にいる者には意味が通じない。相手に説明するための論理的表現の手段を持たないのである。

4. 表現を伝えるメッセージ

メッセージを伝える相手の立場や状況

を考えて、自分のいいたいことを論理的に組み立てて説明する、という本来言葉を使う当たり前の状況は、メールのような伝達手段が増えてくると相対的に減ってくる。手紙やはがきを書く機会が減った人は少なくないはずだ。そのコミュニケーションの質の変化にも、みんなうすうす感じている。だからといって、論理的に言葉を組み立てて、説明する必然性はけっして減っているわけではない。

相手に自分が何を伝えたいかということは、コミュニケーションの本質だ。その場の雰囲気や感情を表現する絵文字コミュニケーションならば、一時的な感覚を共有するコミュニケーションにとって有効だろう。しかし、議論やプレゼンテーションの場面では、相手に伝えたい事柄と、それを伝えるための論理化された手段の双方が必要なのである。

芸術の学生にとっては作品作りがもっとも大切な仕事になるが、自分が表現した作品をどう伝えるか、というプロセスも大切な能力のひとつである。

社会的なかわりをさらに密接に持つデザインの仕事ならば、なおさら説明する能力が大切になってくる。第三者に受け入れられなければ、せっかく考えたアイデアが実現されることもなくなる。自分が主張したいアイデアや感性に、その

役割や独自の意味をわかりやすいようにまとめ、言葉を使って他の人に伝える、というプロセスは、客観的な論理プロセスである。主観的な表現が求められながらも、客観的な表現でそれを構造化していく、それを反芻することにより、独自性を伴った豊かな表現をさらに深めていくことができるのである。

日常使っている日本語の言葉も同様である。絵文字のメッセージは自己表現である。自分が思っていることを、どういうふうに表示して相手に伝えるのか。気軽さゆえに、いい加減なメッセージを表現していると、うすっぺらな表現しかできなくなる。

携帯メールで絵文字を使いこなしながらも、ときには自分をわかりやすく相手に説明できる言葉や、見知らぬ相手を理解したうえで声をかける言葉があって、豊かな自己表現が可能になる。

言葉の持つ可能性は幅広い。新たな表現が生まれて、そして消えていく。その中で人生を豊かに生きていくうえで、どうしても必要な言葉の表現方法がある。そのことを理解して、絵文字を利用したコミュニケーションを使いこなしていくことは、日常のコミュニケーションをさらに楽しくしていくに違いない。

(うえきたやすふみ デザイン方法論)